

本文篇の左側奇数頁には、おおむねメレンドルフ式に従ったローマ字転写と、ローマ字転写の各行の下に「直訳に近いもの」を記し、右側偶数頁には、「やや自由な訳文」と、著者が底本と考える所謂『崇禎本金瓶梅』を載せている。また偶数頁の「やや自由な訳文」の漢字には、しばしばカタカナで思いきったルビがふられており、日本語として意味がよく通るように工夫されている。

注釈は、本文篇の後にまとめて掲載されており、この注釈には、満洲語・漢語・日本語・欧語索引が巻末に附されている。初歩的な満洲語の文法知識のほかはコンテキストから意味を取るしかすべを持たない評者にとって、この注釈はきめ細かな文法書・辞書のように感じられた。しかもこの注釈を、「ara-とweile-」のように似たような意味だとは知っていても、正確にはどう同じでどう違うのかうまく説明できない言葉や、「seme bihe」のようにたまにしか見ないが、出くわすとう訳すべきか、呻吟してしまう言葉を満洲語索引から検索できるのである。著者は、本書で示した『満文金瓶梅』の研究訳注作業の先に、辞書編纂を考えているようで(本書3-4頁)、本書の注釈と索引が周到に作成されているのも頷ける。

本書と、本書に続くであろう第11回以降の研究訳注を含めた著者の今後の成果を、学界(満洲語学・清朝史学)の共有財産とするためにも、言語学研究者による本書の本格的な専評が待たれる。

(楠木賢道)

李治亭主編『愛新覺羅家族全書』

アイシン=ギョロ氏に関する文献はこれまでも多数刊行されているが、このほど、その決定版ともいえるべき一大叢書が編まれた。全10冊から成る『愛新覺羅家族全書』(李治亭主編、A5版、吉林人民出版社、1997年5月)が、それである。戴逸氏による序文や、李氏の「前言」によれば、本書は、清朝史・満族史さらに中国家族史研究におけるアイシン=ギョロ氏研究の意義に鑑みて編纂されたもので、一族の歴史と現状とを包括的に叙述することを目的としているという。本書の編纂は1995年7月から翌96年8月にかけて行なわれ、全体の編集の任には、主編の李氏と副主編の馬宝珠・張玉興・劉厚生・柳海松・魏克威の五氏とが当たり、

執筆には、清朝史・満族史の研究者ばかりでなく文学・美術などさまざまな分野の研究者・専門家、さらに現在活躍中のアイシン=ギョロ氏一門の諸士など総勢80余名が参加した。各巻の篇目と編著者は、以下の通りである。

- 1 家族全史 劉小萌（著）
- 2 世系源流 姜守鵬・劉奉文（著）
- 3 人物薈萃 鞠殿義（主編）
- 4 家事本末 習書仁（主編）
- 5 家法礼儀 劉厚生（主編）
- 6 詩詞擷英 馬協弟（主編）
- 7 文集述要 張玉興（主編）
- 8 書画攬勝 李理（著）
- 9 養生妙法 張莉（主編）
- 10 典逃備覽 柳海松（主編）馬恩巨・柳青松（副主編）

この構成を一瞥しただけでも知られるように、本書の取り扱う分野は極めて多岐に亘っており、「全書」の名に恥じぬものとなっている。以下、内容を簡単に紹介する。

まず、本書の収録基準として、時間的には1583年のヌルハチ挙兵から1995年までの400余年を対象に設定しており、また人物の収載については、物故者であることを条件に挙げていて、現在存命中の人物は若干の例外を除き収録しない方針を採っている。全体としては清朝滅亡以前が中心となっており、入関前史にも比較的分量が割かれている一方で、現代史については簡略である。各巻巻頭には、総説として「概述」の項が設けられているので、これを全巻通読するのも有効であろう。

全体の総説をも兼ねる第1巻『家族全史』は、本書の編纂が開始された1995年に専著『満族的部落与国家』（吉林文史出版社）を公刊した気鋭の研究者劉小萌氏によるもので、明初から説き起こして1994年の溥傑氏の死去はじめ現在の動静までを通史としてまとめており、入関前史中心に最新の研究成果や氏の創見をも随所に盛り込んでいる。以下の各巻は、大別して、第2・3・4巻では人物の伝記や系譜が扱われ、第5・9巻には制度典礼から宗教・習俗にまで及ぶ規範・習慣全般が、また第6・7・8巻には詩文・書画の作品と解説が、それぞれ収められてい

る。第10巻『典迹備覧』は、入関前の満文史料から現代の研究書・小説までのあらゆる文献・書籍と、印璽・佩刀から陵墓・古戦場までのあらゆる文化財・史跡とを網羅した事典である。この第10巻と同じく、第3・5・8・9巻も事典の体裁をとっており、筆画順に事項が配列されている。

「前言」でも断っているように、これら10冊各巻の間には内容の重複もまま見受けられるが、それぞれの巻は単独の著作として首尾一貫するよう配慮がなされており、巻相互の若干の重複・齟齬はやむを得ぬであろう。例えば、対象年限の上限を前述の如く1583年に置いたのは一つの見識というべきであるが、第3巻『人物薈萃』には「孟特穆」（猛哥帖木児）の項を立てるなど、巻によっては猛哥帖木児や福満から説き起こすくだりも散見される。しかし、それは方針の不統一というよりは、各巻の裁量によるものと看做すべきであろう。また、内容的に注目すべきものを挙げるならば、入関前から乾隆期までの政治史・制度史を扱う研究者にとって、第2巻『世系源流』に収める一族略系図は、披見・検索の容易でなかった『愛新覺羅宗譜』に比し、簡便な早見表として有益である。このほか第5～9の各巻には、歴史学研究者にとって有用な関連諸分野の知見も多く収められていて、興味深い。ただ、分野による執筆方法の違いからか、巻によっては出典・典拠を挙げていないなど若干の問題があることは、今後本書を活用していくに際して惜しまれる点である。

多方面に亘る豊富な内容をもつ本書は、本年刊行されるはずの『愛新覺羅宗譜』とともに、今後清朝史・満族史研究にとって必備の基本書の一に数えねばなるまい。

（杉山清彦）

頼恵敏著『天潢貴胄——清皇族の階層結構與經濟生活——』

清代の經濟は、これまで多種多様な角度から論じられてきたが、皇族及び宗人府というと、皇室を論じる際の附屬的要素として扱われてきた傾向があり、こと經濟に関して皇族を別個に取り上げた研究はあまりみられない。本書（中央研究院近代史研究所專刊81、A5版、359頁、中央研究院近代史研究所、1997年6月）は、